

審査委員選評

読者に「開発研究の面白さ」を伝えたいというのが本書の目的であり、そもそも「開発研究」という領域が「学問として成り立つのか」という問いかけに答えたいというのが筆者の思いである。本書は「第1部 開発・援助の知的技術」、「第2部 開発・援助の想定外」、そして「第3部 開発・援助と日本の生い立ち」の3部から成り立っており、さまざまなテーマを取り上げながら、開発の意味や技法、そして開発研究という学問のあり方について縦横無尽に論じたエッセー集である。

本書の魅力は、なんとといっても「開発研究」というテーマも方法も確立していない領域に果敢に取り組んだ点にある。「開発研究」の特徴は、開発にかかわる「さまざまな問題の発見」と「課題の解決」を求める点に特徴がある。「問題」が先で「方法」が後という学問領域であるため、既成のディシプリンを機械的に応用するのではなく、問題の発見と同時に分析方法自身をも模索せざるをえない。なんともやっかいな研究分野である。本書の第1部と第2部で、筆者はアマルティア・セン、アルバート・ハーシュマン、ジェームズ・スコットといった「越境人」の議論から得られたインスピレーションを批判的かつ精力的に吸収し、生活の質の評価、事例分析の意義、分業のもたらすリスク、「想定外」による開発の失敗、被災者へ援助物資の分配方法、「資源の呪い」の克服手段といったさまざまなテーマを取り上げている。どの章からも、従来見過ごされてきた開発にかかわる重要な論点が浮かび上がってきており、見事である。

第3部でとりあげたテーマは、1部および2部とは関連はなく、我が国の援助史・援助体制をとりあげたものである。1950年代に着目し、「賠償に先立つ経済協力」あるいは「復興を中心に見据えた経済協力」という理念の系譜をえぐり出した点は、歴史研究としても見るべきものがある。

本書は開発研究の一つのすぐれた出発点として高く評価できる。筆者には、今後さらに分析概念に磨きをかけてわが国の開発研究を新たな高みへと飛躍させてくれることを期待したい。(絵所 秀紀)

受賞者の言葉

「大来佐武郎」の名を冠した伝統ある学術賞受賞の報に触れ、心から喜んでおります。私の近年の研究は、大来の仕事と生き方をたどるようなものでした。前著『「持たざる国」の資源論』(東京大学出版会、2011年)では、日本が援助の「受け手」であった1950年代前半までの資源問題、特に大来とGHQの技術顧問であったエドワード・アッカーマンとの交流の結果として生まれた資源委員会の意義を跡付けました。米国の公文書館で見つけたアッカーマン宛の大来の書簡を読んで印象的だったのは、大来の英語力の高さと、日本製の便せんのもろさでした。便せんの紙質にみる圧倒的な日米格差に私は当時の日本の貧しさを重ね、同時に文面にみみぎる明日への希望を感じたのです。

今回の本では、そんな貧しさの中で日本が経済協力の「送り手」に回りはじめた1950年代中ごろ以降の大来の対外的な活躍に注目しています。かくも短い期間に、戦後日本経済の立て直しと途上国への経済協力がありました。

問題は、大来の足跡から何を学ぶかです。私は、日本が自らの復興経験を踏まえて如何に援助供与国への転換を果たしたのか、というテーマを理念的、組織論的に再検討し、そこから現代への政策的示唆を導出することが大来の残した宿題の一つであると考えました。今回の受賞作では日本援助の問題点として批判されてきた「理念の欠如」と「司令塔の欠如」に焦点を合わせ、それぞれの「欠如」が何か積極的な役割を果たしてきたのではないかという大胆な仮説を示してみました。

大来の生き方から学ぶことは、他にもあります。中でも開発問題に接近する際の「専門性」の在り方は重要です。「なんでもいいから一つ専門をもって」は開発分野を志す若手に向けて発せられる常套句となりました。しかし、専門性のマスターに汲々としているうちに、真ん中に見据えるべき問題が置き去りにされる、あるいは方法論の呪縛に囚われるあまり、知的なワクワク感がそぎ落とされるようなことはないでしょうか。東京大学工学部で電気工学を学んだ大来は、後に「エコノミスト」に文転しました。何を専門に学んだのかではなく、学んだことを生かしてどのような仕事を残したのか、を問うべきです。

世界をリードする米国の学問状況と比べて日本の良いところは、まだ個別科学(ディシプリン)による支配が行き届いていないところ、つまり問題の性質に合わせて方法を組み合わせる余裕が保全されている点にあります。私は、開発経済学でもなく、開発政治学でも開発社会学でもない、開発学そのものを提示する試みとして今回の受賞作を執筆いたしました。

大来が日本の復興と途上国への経済協力という二つの分野で続けざまに活躍できたのは、決まった「ディシプリン」に縛られることなく、時代の求めに応じて巧みに適応する身のこなしに長けていたからだったのかもしれませんが。現代世界は、1950年代以上にすさまじい速さで変化しています。それに対応できる開発研究とはどのようなものか、私たちが大来から学ぶべきものはまだまだありそうです。末筆ながら、私の拙い本を取り上げてくださった選考委員の先生方に深く感謝いたします。 佐藤 仁



さとう じん

1968年生まれ。東京大学東洋文化研究所・教授(総長特任補佐)、プリンストン大学ウッドロー・ウィルソンスクール客員教授。第10回(2013)日本学術振興会賞および日本学士院学術奨励賞を受賞。

主要著書

『「持たざる国」の資源論—持続可能な国土をめぐるもうひとつの知』(2011年、東京大学出版会)。『稀少資源のポリティクス—タイ農村にみる開発と環境とはざま』(2002年、東京大学出版会)。『The Rise of Asian Donors: Evolution of the Emerging Donors and the Impact of Japan』. Routledge (共編著) 他。

欧州からの視点を取り込んで読み解いている。民主化支援と良いガバナンスの違い、それらが開発援助に登場することになった経緯他、改めて考える契機となる。近年、開発援助と安全保障との関係が一層緊密になっており、本著の分析は重要な知的基盤となろう。

『市場を織る—商人と契約: ラオスの農村手織物業』(大野 昭彦 著、京都大学学術出版会)は、経済学の教科書的な市場ではなく、生産者と消費者をつなぐ市場が実際にどのように形成され、間をつなぐ「商人」にはどのような役割があるのかが、手に取るようにわかる。長年にわたる地道な研究の蓄積をもとに取り纏められた力作である。

『農村景観の資源化—中国村落共同体の動態的棚田保全戦略』(菊池 真純 著、御茶の水書房)は、農村景観を含め、当事者が意識しない「資源」に着目し、世界各地におけるその活用法を検討した。この点は、今後の開発研究においてさらに推進させられるべきであり、本著はその意味で普遍的価値がある。

【第21回(2017年度)審査委員会】 委員長 杉下 恒夫 (FASID理事長)
委員 荒木 光弥 (国際開発ジャーナル社代表取締役・主幹)
絵所 秀紀 (法政大学教授) 大野 泉 (政策研究大学院大学教授)
滝澤 三郎 (認定NPO法人国連UNHCR協会理事長、東洋英和女学院大学院客員教授)
岡田 尚美 (FASID専務理事)